

《特集にあたって》

## 現代史再評価の試み 歴史特集・三本の論考について

別枝 行夫（編集委員会）

21世紀に入り3年の歳月が流れた。歴史家ならずとも「20世紀はどのような時代であったか」との総括を試みたい気分になるであろう。今回本誌に掲載された以下の三本の論文は20世紀前半（厳密には19世紀末から1953年まで）の中国・台湾・日本に関わるものばかりである。簡単に紹介し、そこに共通する視点を見出そうと思う。

呉文星氏（台湾師範大学）の論文「近代日本における学術と植民地—開拓すべきもう一つの新たな研究分野」は19世紀末以降、日本の台湾統治期に日本の学者・専門家が果たした役割を再検証し光を当てようとの提言である。すでに呉文星氏は1990年来このテーマに関する論考を多数発表してきており、今回こうした研究で得た知見を通し、改めて近代学術が日本の植民地経営においてどのような役割を果たしてきたかを検討した。氏によれば東京帝国大学、京都帝国大学や札幌農学校に代表される研究者・専門家達は、台湾の自然、地理、資源、物産、人文に関する詳細な基礎調査を土台にして、台湾の実業—例えば糖業—改革に寄与した。また建設・土木方面での貢献も大きかった。こうした彼らの活動の多くは台湾総督府が直接間接に委嘱したものであった。高等教育機関の教員や卒業生は台湾のみならず満州・朝鮮においても同様の役割を果たしたが、そのことが「台湾経験」とどう結びつくのか、西洋の植民地経営との異同は何か、日本の学術は植民地研究によってどう変化したのか……を含む総合的な研究を始める時が来たと氏は提言している。

聞黎明氏（中国社会科学院）の論文「聞一多暗殺事件と1946年の時局」は中国の著名な詩人にして自由主義者である聞一多が1946年に昆明で暗殺された事件を、当時の社会背景を含めて改めて問い直した労作である。45年の日本敗戦から49年の新中国成立までの期間は日本人にとってやや盲点となりやすい時期である。新国家建設のための産みの苦しみを味わっていたこの時期は、逆に中国が思想面で最も「豊か」であった時期ともいえる。同時期にやはり昆明で国民党の特務により暗殺された民主運動家の李公樸と聞一多はともに中国民主同盟に関わっていた。長く困難な抗日戦争を終え、団結に向かうべき中国人が結局また国共内戦に突入してしまう過程で李公樸・聞一多の暗殺事件が大きな意味を有していたこと、また、中国にとっての1946年の意味が、本論文の丹念な記述でよりよく理解されるであろう。

鹿錫俊氏(島根県立大学)の論文「東北解放軍医療隊で活躍した日本人—ある軍医院の軌跡から」は中国における日本の敗戦から新中国建設過程で、「留用」された日本人がどのような活動を行ったかを、現地調査に基いて描き出すことを試みた意欲的な論考である。留用とは、敗戦後中国側(国民党あるいは共産党)からの要請に応じて中国に留まり、企業活動や医療活動等に従事したことを意味する中国語である。鹿氏は科学研究費プロジェクトで自らが代表者として取り組んでいるこのテーマの中間報告として本論文を著した。敗戦後、日本人がその専門知識をかわれて中国に留まった事実は、日本側ではこれまでも当事者の回想の形で、断片的ではあれかなり語られてきた。有名なものとして『北京三十五年—中国革命の中の日本人技師』(上・下、岩波新書、1980年)があるが、一方中国にとってはある種の「敏感な」(政治的に微妙な内容を含むことを中国ではこう表現する)問題であった。すなわち敵であり、しばしば「鬼子」とまで呼び忌み嫌った日本人が、戦後の中国で活躍し、「甚だしきは」新中国建設に「多大な貢献を果たした」という話が、声を大にして語りたいた題材でないことはよく理解できる。戦後日本で時には閣僚や有力政治家が「大東亜戦争には良い面もあった」などと語った時、中国や台湾あるいは韓国、北朝鮮で激しい非難が巻き起こったことは記憶に新しい。それゆえに「敏感」なのである。したがって鹿氏の現在進行中の現地調査も非常に慎重に進められている。鹿氏が現地調査を一段落させ、プロジェクトの最終報告書を上梓するまで、われわれはこうした配慮に理解を与えるべきであろう。

今回の論文で取り上げられた日本人医師や看護師等は、1945年から53年すなわち解放、国共内戦、新中国建設という現代中国の基礎を築いた過渡期に、国共間の争いがとりわけ激しかった中国東北地方で解放軍医療隊に所属し活動した人々である。東北に進軍した共産党軍は地域の日本系の病院を接收し、医師・看護婦を徴用した。彼らの多くは必ずしも自発的に協力を申し出た者ではない。東北では日本敗戦直前にソ連軍が参戦し国民党・共産党(解放軍)・ソ連の三軍が交錯し混乱をきたしていた。当初は解放軍との関係にも摩擦が多かったようであるが、彼らの献身的医療活動が徐々に高い評価を受けるようになった。

しかし、留用された日本人たちのその後は概して苦難に満ちていた。帰国の希望が容易に叶わなかった者も多く、また幸いに帰国した場合も、彼らを待ち受けていたのは「共産中国への協力者」の烙印であり、53年以降警察・公安にマークされる日々であった。再就職もままならず、周囲からも複雑な目で見られたという。こうした一面を明らかにしたのがNHK—TVの番組「留用された日本人」(2002年)であり、番組取材班による同名の書『「留用」された日本人—私たちは中国建国を支えた』(NHK出版、2003年)である。

同書の「あとがき」によれば、日本外務省は留用に関する資料は一切ないと回答している。今日まで、我が国で公的な記録がほとんど入手できない事情を知れば、鹿氏の研究が持つ意義が理解されよう。

さて、以上三つの研究論文は、中国大陸・台湾（中華民国）・日本にそれぞれ研究拠点を置く研究者のものであり、それぞれの研究動機も異なっている。にも拘らずそこにはある共通点が見いだせる。それは何れも「定説」に異を唱える、あるいは綿密な資料調査や聞き取り調査を通じて、これまで十分に解明されていなかった歴史を明らかにする試みである。特に呉論文・鹿論文には日本支配時期における日本人の行動を再評価する（繰り返しになるが多分に微妙で「敏感な」）側面があり、歴史論議に一石を投じることになる。聞論文も聞一多暗殺に関しこれまで知られていなかった詳細な背景を解明した点に多大な価値がある。こうした優れた歴史研究を今回集中して掲載できたことは、編集担当者の大きな喜びとするところである。